

2016.12.15：平成28年第4回定例会(第6日目) 本文

○四番（菅原正和）自由民主党の菅原正和です。議長のお許しをいただきましたので、一般質問をさせていただきます。

私からは、本市が取り組む新たな施策として、せんだい・アート・ノード・プロジェクトを関連づけたせんだいリノベーションまちづくりについて、新たなインバウンド戦略としてのスポーツと観光について、開業から一年を経過した地下鉄東西線とバス路線再編の取り組みについて、以上、大綱三点について順次質問をまいります。

奥山市長は、市政だより八月号の市長コラム、杜のたよりに記事をお書きになっております。内容を拝見しますと、「まちにも模様があえ！」のタイトルで、四季折々の風情を楽しみ、夏の暑さ、冬の寒さをしのぐ工夫の一つが模様があえ。室内の装飾や家具の配置を変えることで、気分が一新した経験を持つ方も多いことでしょう。そんな模様があえがまちづくりにあっても面白いでしょうねとの記述があります。新たなまちづくりの形として、まちづくりリノベーションを紹介しております。記事の結びには、昨年からはじめたリノベーションまちづくり、仙台にどんな新しい風を吹き込むか目が離せませんと、かなりの期待感を寄せているのではないかと私は感じました。

本市は、新たなまちづくりの事業として、昨年度からストック活用型都市再生推進事業が開始され、本年度からはせんだい・アート・ノード・プロジェクトが始まりました。この事業に共通していることは新たなまちづくりというキーワードであります。と同時に、公民連携、市民協働です。

仙台市は、平成二十八年度、公民連携による遊休不動産及び公共空間の利活用を図ること、にぎわいのあるまちづくりを推進し、本市の新たな経済成長モデルの構築につなげるとして、一千七百七十二万四千円の予算でストック活用型都市再生推進事業を行っています。この事業は、中心部の老朽ビルを活用して、若手起業家に入居してもらい、まちの活性化を図りたいと仕掛けたものです。

本市は、この事業を始めるに当たり、北九州市の先進事例を参考としたと伺いました。私も、十一月八日から所属している都市整備建設委員会の委員会視察で北九州市のリノベーションの実態を視察してきました。

北九州市、政令指定都市で一番高齢化率が高く、人口減少数も一番多く、さらに路線価下落率も高い。大規模製造業の本社機能の転出、大企業支店の転出、高い所得階層の転出、生産年齢人口の減少という問題を抱えておりました。

この現状を改善するために、行政、地域住民等と連携し、空きビルの店子集めや事業支援を行い、地元の商店や企業との交流を手助けする等、まちの再生に取り組む小倉版家守構想づくりを北九州市がリード役となっていきましたが、実際のプロジェクトは、民間が手を挙げ、これを北九州市がサポートする形で進められておりました。北九州市のリノベーションの目指すところは、まちの中に点在する遊休不動産の再生とその中身となるコンテンツの創造、更新の

イノベーティブな実行にあります。本市においても民間の家守会社がすぐ立ち上がったことは、実にすばらしいことです。

ただし、ここで問題が生じます。市の中心部はそもそも空き物件が少ないこと、さらに一定のにぎわいがあることです。しかし、仙台市は活気がある、活用できる空き店舗や空きビルは少ないという状況は将来にわたり続くものではありません。震災復興事業関係者や被災者の転出など、さらに生産年齢人口が二〇二〇年には六十六万九千人に減少するなど、人口減少社会は必ず訪れ、ビル等も淘汰される時代がやってきます。この事業はそうなる前にいかに手を打っていくかということであり、今後の仙台のまちづくりには欠かせないと思います。

今年度、第二回定例会の会派の代表質疑における、せんだいリノベーションまちづくりの昨年度までの取り組みに関する質問に対して、局長からは、不動産オーナーの理解も進み、少しずつではあるが動いているという答えが返ってきています。

そこで、本市中心部における遊休不動産に関する不動産オーナーの認識とせんだいリノベーションまちづくりの役割についてどう捉えているのか、御所見をお伺いいたします。

また、今年度から公民連携で家守舎が本格的に実施の段階に入ってきています。定禅寺ビルの屋上テラスを活用したイベントでは、定禅寺通のケヤキ並木が上から見ると緑の川に見えたり、光のページェントでは光り輝く並木を上から見ようという企画も立ち上げられています。公共空間の活用では、定禅寺通の遊歩道を使った第三の居場所づくり、3rd LIVING at JOZENJI PARKなどのイベント等が行われてきています。

そこで、リノベーションまちづくりの今年度のこれまでの公民連携の取り組みの現状とそこから見えた課題についてお伺いいたします。

さらに、リノベーションまちづくりを推進していく上で、まちづくりを実践し、地域の課題解決を主体的に担う人材は大きなキーポイントになります。

本市は若者が非常に多い都市であります。高校卒業後の若年の大量流入により、十九歳を山とする人口ピラミッドを形成しております。しかし、流入の数年後には首都圏や出身地域に転出してしまふ人が多いため、二十歳代後半にかけて全国の人口ピラミッドには見られない谷が生じております。その上でも、魅力あるまちづくりをする上にでも、若者をどう活用し、どう定着させていくのか、課題の一つであります。

リノベーションを実践することで、若手起業家の活躍の場が広がり、学校周辺に住んでいた若者が中心市街地へと足を向ける流れがつかれると感じております。そのため、次世代を担う若い人たちもあわせて育てていくことも重要であります。まちづくりを進めていく上で、行政の役割の一つとして、こうした人材を育て、さらに活躍できる環境づくりに取り組んでいくことが大事だと思います。人材育成のために今後どのような取り組み方針でいくのか、お伺いいたします。

次に、他局との連携についてお伺いいたします。

教育局が取り組んでいる施策に、せんだい・アート・ノード・プロジェクトがあります。せんだい・アート・ノード・プロジェクトは、せんだいメディアテークの経験と実績を生かしな

がら外に向けて発信するアート事業で、平成二十八年度からの新規事業として開始されているものです。具体的には、アーティストが滞在し市民と交流し、制作プロセスを共有したり、制作過程を公開しながら事業を推進していくものです。

先ほども述べたように、仙台市の若者人口は多く、魅力ある仙台市をつくっていくためにはこの若者のエネルギーが必要になってくると考えます。

学都仙台といいながら、仙台には芸術系の専門大学はなく、才能ある若い世代が他県に流出し、仙台に戻ってこないのではないかと感じております。このせんだい・アート・ノード・プロジェクトに高校生のうちからかかわれるチャンスをつくり、仙台でも活躍の場があり、いろいろなアーティストから学ぶことができ、自分の作品等が残せるという夢を与えることも大事であります。活躍する場をつくることで、才能ある若い人材の流出を抑制することができるのではないかと考えます。

せんだい・アート・ノード・プロジェクトの取り組みの一環に、高校生、若年層を対象とした芸術を実践的に学ぶメディアテークの新たな事業として、青少年の生きる技術としての芸術学校が開催されました。一番町のビルの中にある、かつてはナイトクラブであった場所を、アートが生まれる場所にせよという課題を与え、活用する企画を考えさせるといった、芸術を実践的に学んでいく取り組みが行われました。

魅力ある仙台をつくっていくには市民の力が必要であり、こうした若い世代の力に期待を寄せているところであります。若い世代の育成、活躍の場の創出といった点で、これらを含む今年度始まったアート・ノード・プロジェクトの取り組みについてどのように考えているのか、お伺いいたします。

今までとは違った新たな空間資源の利活用の観点から、こうした取り組みはリノベーションまちづくりと通じるものがあると考えます。公民連携、市民協働というキーワードで共通するこれらアートとリノベーションまちづくりが連携していくことで、若い世代の活躍の場を広げ、人材の育成を図るとともに、さらに人々の関心を招き、まちのにぎわい創出につながると思いますが、奥山市長の御所見をお伺いいたします。

続いて、スポーツと観光についてお伺いいたします。

国土交通省観光局がスポーツと観光を日本の観光施策の重要な柱に位置づけ、二〇一〇年五月にスポーツツーリズム推進協議会を設置しております。

まちのにぎわいづくりには、スポーツと観光を融合させるスポーツツーリズムの推進が重要な役割を持つと考えます。大事なのは、スポーツで人を動かす仕組みをつくることです。その際、平成二十六年十二月に設立されたスポーツコミッションせんだいを中心とした取り組みが重要であると考えます。

全国の先進事例として他都市からの視察が絶えないとお聞きしておりますが、設立から二年が経過しようとしておりますが、設立以来これまでどのような取り組みをしてきたのか、お伺いいたします。

ユニークな取り組みでスポーツと観光を推進している徳島県阿南市の講演を聞く機会があり

ました。

阿南市は、二〇〇七年、天然芝、電光掲示板、場内アナウンスもできるJ Aアグリスタジアムを整備したきっかけに、草野球の聖地を目指せをキャッチフレーズに、プロ野球のキャンプ地ではなく、全国からシニアの草野球チームを誘致し、まちおこしを行っております。対戦相手がいなくても、阿南市のシニアチームが対戦相手になる。アナウンスも本格的にやる。本格的なチアリーダーが応援し、試合に華を持たせる。しかし、そのチアリーダーは全員が六十歳以上、チーム名はAKB48ならぬABO60で、阿南・ベースボール・おばちゃん・六十歳以上を略して名づけられております。人数は二十八名、赤いちゃんちゃんこにちなんのでそろいの赤いシャツに白いミニスカートををはき、ポンポンを持ち、遠目から見たらおっと思いますが、近づいて驚き。しかし、とても人情味あふれる応援をしてくれるそうです。さらに、夜の宴会では阿波踊りの踊り手が生の阿波踊りを見せてくれるそうです。

この企画に全国のシニア草野球チームが乗り、わざわざ家族同伴で、阿波踊り、シニアチアリーダーを楽しみに何度も阿南を訪れ、経済効果は二億円であるとのこと。

本市のスポーツコミッションでも他都市にはない魅力ある取り組みを行うべきと考えますが、本市独自の取り組みはどのようなものがあるのか、さらに今後の取り組みに対しても御所見をお伺いいたします。

次に、インバウンドの視点からスポーツツーリズムを推進するのは重要なことであり、スポーツを通じて海外からお客様を積極的に呼び込むことは非常に大事です。

アジアの中間層が勃興し、一定水準の所得を得るとまず最初にすることが海外旅行と言われております。さらに、SNSの普及で、関心を持つとすぐ検索し、現地に着けば写真を撮り、感動を共感するためにフェイスブックなどに投稿する。この流れができております。

現在、仙台空港にはエバー航空、タイガーエア台湾と週何便もの飛行機が台湾から飛んできますし、飛んでいきます。LCCのタイガーエア台湾の就航は台湾と仙台をより身近にするものです。スポーツツーリズムは、隠れた資源であるスポーツを旅行商品化することにあります。

仙台の観光とスポーツの中で特に重点を置いているのが仙台国際ハーフマラソン大会です。この大会に台湾選手枠を設けるのはどうでしょうか。

さらに、する、見る、支えるの観点から、本市が持つスポーツ資源、野球、サッカー、バスケットボール、バレーボール、ガールズプロレスリングなどの観戦の見るスポーツの商品化、ハーフマラソン等のボランティア協力、ふだん味わうことができない体験はスポーツの観光商品化として最適だと考えますが、文化観光局として今後どのような取り組み方針であるのか、御所見をお伺いいたします。

最後に、バスの路線再編について質問をさせていただきます。

十二月六日で開業から一年を迎えた地下鉄東西線、それに伴いバス路線再編が行われました。今まで、定例会、常任委員会、決算等審査特別委員会、そして今定例会でもバス路線再編の質問が出ておりますが、再度質問させていただきます。

私の住んでいる地域は、若林区南小泉、遠見塚地域です。バス路線再編でフィーダー化し、薬師堂を結線とする路線変更になりました。

交通事業管理者は、答弁の中で、バスと地下鉄の適切な連携により市民の足を確保し、次の世代に確実に引き継いでいく。一方、交通需要の総量は減少傾向が続いている。東西線の開業によりバスの利用が大きく落ち込んでいる。バス事業の将来に向けた継続のためには、需要に応じた対応を考えざるを得ないという認識を述べておられます。

バス路線変更地域からは、不便になったバス路線、どうかならないものかという要望が多くの町内会から聞こえてきています。住民は今回のバス路線再編に対しどのような意見を持っているのか、まず住民の意見を吸い上げることが必要であるということで、南小泉、遠見塚両地域、一部近隣を含む全戸に四千枚のアンケートを実施いたしました。四千枚のアンケートの回答枚数は現時点で四百二十一件、全体の一〇・五%の回答が寄せられております。住民の関心の高さがうかがわれました。

アンケートを集計すると、現在地下鉄を利用していますかとの問いに、三百三十八件、八割の方が地下鉄を週一回から二回、月一回から二回利用している方でした。さらに、大半の回答が、不便になったが我慢して乗っているという回答を寄せてきております。

バスを利用しなくなったという問いに対し、七十八名、全体の二%の方がバスから車に交通手段を切りかえたという数字が出ております。環境負荷の軽減や渋滞緩和には逆行し、さらに、近ごろ頻繁に報道されている高齢者の自動車事故誘発にもつながる可能性があります。

今回のアンケートは二十代から八十代まで幅広い年代から回答を得ています。しかしながら、六十代以降の回答が全体の五八・二%を占めております。この数字から読み取れることは、バスは高齢者にとってなくてはならない大切な足であるということだと考えられます。

アンケートの回答の中には、運行経路の変更や増便、地下鉄との接続の改善などさまざまな要望が含まれております。要望に関しては既に当局にもお伝えをしておりますが、こうした声をどのように受けとめているのか、御所見をお伺いいたします。

今回実施したアンケートでは、路線再編以前の経路、すなわち東西線結線駅を経由せず、JR仙台駅前や東北大学病院方面へ直行する便の復活を望む声が多かったことは事実です。これは、そもそも今般のバス路線再編にかかわる基本原則から外れるものだと承知しておりますが、地元の生の声として寄せられた要望には切実なものがあります。

こうした声に応えるべく、当局の御努力をぜひともお願いしたいと考えております。御所見をお伺いいたしまして、私の一般質問とさせていただきます。

御清聴まことにありがとうございました。(拍手)

○市長(奥山恵美子) ただいまの菅原正和議員の御質問にお答えを申し上げます。

アートトリノベーションまちづくりに関連してのお尋ねでございます。

せんだい・アート・ノード・プロジェクトは、地域においてアーティストが滞在して作品を制作することなどにより、地域が抱える課題に向き合い、まちの魅力と人々の活気を引き出すことなどを目的としております。

市民の皆様が多彩なアート作品に触れ、制作にかかわることは、アートを通して学びながら成長する機会となり、将来の仙台のまちづくりを担う若者の人材育成の役割も果たすことができるものと期待をいたしているところでございます。

さらに、本プロジェクトを推進していく過程で、新しい芸術文化活動が根つき、まちの魅力が作り出されることにより、若い世代が活躍する新たな場の創出にも寄与するものと捉えております。

そのような中において、リノベーションまちづくりとの連携については、アートの持つ自由さ、独創性といったものがリノベーションにも通ずるところがあるかと考えておりますので、今後、それぞれの事業のさらなる相乗的な効果が生まれますよう取り計らってまいりたいと考えているところでございます。

そのほかの御質問につきましては、交通事業管理者並びに関係の局長から御答弁を申し上げます。

以上でございます。

○文化観光局長（館圭輔）私からは、スポーツツーリズムに係る二点の御質問についてお答えをいたします。

まず、スポーツコミッションに関する御質問にお答えいたします。

本市のスポーツコミッションは、プロスポーツ球団や宮城県及び近隣市町、観光団体や大学といった多様な団体により構成されていることが特色でございます。

これまで、地元競技団体等と連携し、国際大会及び全国大会などの誘致に取り組んできたところであり、本年では、七市町村を会場とした全日本選抜還暦軟式野球大会の誘致、また、本市ゆかりの福原愛選手などが参加した卓球女子日本代表のリオデジャネイロオリンピックに向けた合宿を誘致するなど、本市ならではの取り組みを進めてきたところでございます。

今後も引き続き、広域的な連携のもとさまざまな取り組みを進めてまいりたいと考えております。

次に、インバウンドの視点からのスポーツツーリズムに関する御質問にお答えいたします。

海外からの観光客の誘致のため、スポーツを資源として活用することは重要であると考えております。仙台国際ハーフマラソンにおきましても、こうした視点から、次回大会より台湾など海外在住者向けの出場枠付きの旅行商品の販売等を予定しているところでございます。

また、ベガルタ仙台や楽天イーグルスと連携して、プロスポーツを観光資源として活用し、外国人観光客の誘致の強化を図るなど、東北全体の交流人口の拡大の観点を踏まえ、スポーツを大事な観光の資源と位置づけ取り組みを進めてまいりたいと存じます。

私からは以上でございます。

○都市整備局長（鈴木三津也）私からは、せんだいリノベーションまちづくりに関しましてのお尋ねにお答えをいたします。

初めに、中心部における遊休不動産の現状認識とリノベーションまちづくりの役割についてでございます。

遊休不動産の現状について、リノベーションまちづくり実行委員会に参加する不動産オーナーからは、路面店にはあきがほとんど見られず、現時点では危機感は余り感じられないが、上層階にはあきがふえてきており、復興需要の収束により今後に懸念を持つオーナーも出てきているように伺ってございます。

リノベーションまちづくりの役割につきましては、民間が公共との新たな関係のもとで遊休不動産や公共空間を活用する取り組みを拡大していくことで、地域の魅力やにぎわいを生み出し、それらの近隣エリアへの相乗的な波及拡大を通じまして、都市活力の維持、向上を図っていくことであると認識してございます。

次に、取り組みの現状と課題についてでございます。

今年度は学生を初めまちづくりに関心を寄せる皆様を対象としたセミナーやワークショップなどを開催し、リノベーションまちづくりについての普及啓発と人材育成を進めてまいりました。

また、これまでに民間ビルの空き室などを活用した取り組みが三件進行しているとともに、定禅寺通や肴町公園を利活用したイベントが四回実施されたところでございます。

今後さらに取り組みを拡大していくためには、より多くの不動産オーナーの理解と協力、さらにはまちづくりの担い手となります人材の発掘、育成と民間主体による推進体制の強化が必要であると考えてございます。

最後に、人材育成についてでございます。

既存の枠組みにとらわれない新しいまちづくりを進めていく上で、その取り組みを牽引する担い手、特に若い世代を育成していくことがこの事業にとって極めて重要であると考えております。

今後、セミナーやワークショップの開催により引き続き人材の発掘や育成を行っていくとともに、公共空間を利活用するイベントにおきまして若い世代がまちづくりにかかわる機会をつくるなど、民間と連携して取り組んでまいり所存でございます。

以上でございます。

○交通事業管理者（西城正美）バス路線の再編に関するお尋ねにお答えをいたします。

昨年十二月の路線再編以降、さまざまな御意見、御要望が寄せられておりまして、東西線駅を経由しない、いわゆる直行便の再設定を望む声も頂戴しているところでございます。

これは、主に高齢者の皆様の中に、定時性や速達性といった地下鉄が有する利便性よりも、乗り継ぎに伴う負担や移動に関する生活習慣が変化することへの抵抗感などを強くお持ちになっている方がおいでになるという背景があるものと受けとめてございます。

既に多くの皆様が東西線利用へと移行をされました中、現下の厳しいバス事業の経営状況のもとにありましては、十分な需要を見込めず、また、追加的なコストを要する直行便を新たに運行することは困難なところでございます。

このため、現在はそれぞれに運行を行っております周辺のエリアと東西線駅を結ぶ便と、東西線駅と仙台駅前方面とを結ぶ便、この両者の一部を連結いたしまして、東西線駅を経由する

ため少々時間は要しますが、乗りかえることなくお住まいの地域から市中心部へ向かうことができる直通便をふやす方向で対応を図ってまいりたいと考えております。

以上でございます。